○記入用紙

JWUシーズ

※＝入力必須項目

研究者名※	伊藤　寿和	学位※	文学博士
所属※	文学部 史学科	職名※	教　授
連絡先	tito@fc.jwu.ac.jp		
URL			
researchmap※	https://researchmap.jp/read0029351		
研究分野※	人文地理学		
研究キーワード※	地図・地誌　景観		
共同研究・競争的資金等の研究課題	日本の畠作に関する歴史地理学的研究(科学研究費・基盤B・研究代表者、1995―1997) 環境適応型農業に関する歴史地理学的研究(科学研究費・基盤B・研究代表者、2000―2002)		
社会貢献・産学官連携活動等			
受賞歴			

研究領域	人文地理学	(SDGs)
研究テーマ※	古代から近世の日本の農業の実態　日本の古代から近世の古絵図の解読	
概要※ (概ね1000字以内) (写真・グラフ等自由)	【研究の背景・目的・内容】 現在では、豊富な肥料や農薬を使用して、緑なす稲穂が実る稲作をはじめとする農業が営まれていますが、そのような農業の実態は、主に、明治時代以後、さらに正確に言えば、戦後の農業景観に過ぎません。 過去の農業の実態を調査・研究することは、過多な肥料や農薬を使用しない、本来の農業を復原することも意味しています。 また、古い古絵図を調査・研究することは、現在では、すでに開発で消えてしまっている日本本来の自然・景観を復原できる有力な方法であると思われます。 【応用例、研究の展望】 これまでの研究により、古代から近世前期までの日本の焼畑は、1年に1度のみ焼いて豊かな収穫を得ていた焼畑であり、人口が増えた近世中期以後、同じ山地を、1年だけではなく、2年・3年・4年・5年と、同じ山地を長期間にわたり酷使する農法に変化したことを明らかにしました。 また、古代から中世におこなわれていました「片あらし」と言う農法の実態も明らかにしました。 【研究方法の特色】 主に、古代から近世に及ぶ古文書・古絵図の解読と、それに基づいた現地調査に基づいています。	
本研究関連特許・論文等	・近世前期における焼畑耕作の実態、史草・51号、2010年11月 ・中世に描かれた「行基式日本図」の歴史地理学的再検討、史草・62号、2021年11月	
共同研究・外部機関との連携への期待	・ ・	